

# 教 仏 名 聞

第45号  
(発行日)

2014年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 誓願不思議を疑いて

### 【和讃法話3】

誓願不思議をうたがいて

御名を称する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすぐとぞときたま

う

現代語意識（念仏往生の不思議な誓いを疑って、自分の行う念仏行によつて往生しようとする者は、あたかも宮殿に閉じこもるような仮の浄土に生まれて五百歳（年）の間、むなしい年時を過ごす、と大経に説き給う）

◎

親鸞聖人の御和讃について、お話をさせていただいています。今回のご和讃は、前

弥陀の名号となえつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもいあり

の内容に関連しています。この和讃では「弥陀の名号となえつつ」で、お念佛を称えつ

つ、そのお念仏のいわれを聞かせていただく。お念仏のいわれを聞くとはお念仏となつて喚びかけて下さる阿弥陀仏の広大な大悲心をお聞かせいただくことなのです。

阿弥陀仏は、私たちが煩惱妄念（我執我愛）によつて自らを苦しめ、それによつて他者を悩ませ、圧迫し、悲しま

せ、また他の生き物を害するような生き方を続けていること、そしてそういう生き方を

変えることもなく、変えようともせず、また変えようと志してもいつまでも変えること

ができません、そのゆえにいつまでも苦しみの境涯から出られない私たちが、阿弥陀仏は案

じられ、心配され、何として罪を除いてまことの幸せを与えてやりたいと思し召し

て、南無阿弥陀仏を仕上げて下さったのであります。

煩惱を起こして自他を害するということですが、相手がつまらんことをすると、それ

にたいしてちよつと腹を立てるだけでも、それは自分も苦しいし、腹を立てられた相手も辛い。腹を立てる

にも訳があり正当な理由があつても、できれば腹を立てずに

に相手をさとし、反省せしめ、あらためさせる。それが慈悲心ある行いでありましょう。

しかし、凡夫はそうはなれず、声を荒げ、きつい顔になり、言葉も行動も乱暴になつてしま

まいます。これに関して、最近テレビでときどき見るのですが、街頭に出てヘイトスピーチをする。

「〇〇人は日本から出て行け」と街の中で団体で大声を上げる。これを耳に聞くだけ

で実に嫌な思いがします。釈尊がおられた当時（約二五〇〇年前）、インドのマガ

タ国の都、王舎城の王宮内で、王子のアジャセ太子が母である

イダイケ夫人を「我が母はこれ賊なり」とのしる。の

のしられたイダイケは、釈尊におあいした時、釈尊に向か

つて「願わくは我、未来に悪声（あくしやう）を聞かじ、悪人を見じ」（「観経」）と願われる。我が

子に「お前は悪人だ」と激しくのしられる、その時のイダイケの悲痛な気持ちはいかばかりだったでしょうか。

この世で私たちは、人を責め、のしる声をどれほど聞いてきたか。また自分自身も

大なり小なり人を責める言葉をどれほど発してきたか。イ

ダイケの言うように、未来はそういう憎しみや怒りの声を聞きたくないですね。

一生の間には、怒りの声をしよつちゅう聞かねばなりません。辛いですね。中国・唐

の時代の浄土教の高僧、善導大師は

「いざいなん、魔郷にはとどまるべからず。広劫よりこのかた六道に流転して、ことごとくみなへたり。いたるところに余の樂なし、ただ愁歎

（しゅうたん）の声を聞く」といつています。

迷いの境界は苦しみの世であり、煩惱の燃えさかっている世界であり、お互いに傷つけあっている、それを（魔郷）

と言ひ、そういう境界をながながと経めぐってきたのが私たちだと、言われています。

そして「いたるところに余の樂なし、ただ愁歎の声を聞

く」と。

世界のどこに住んでも、どこに行っても、いつの時代も、いたるところで聞こえてくるのは「愁嘆の声」であるといわれるのですね。

本当にその通りだと思いません。生活が苦しいからやっつけいけぬの声、景気不景気にわづらう声、子供がいうことをきかないと嘆く声、夫婦や兄弟げんかの声、人付き合いが難しいという声、病気を嘆く声、老化を悲しむ声、死ぬのはやりきれぬという声、戦争や飢餓でのうめき声、いたるところこうした声が満ちていて、安らぎの声、いつくしみの声、喜びの声を聞くことはごく少ない。善導大師は今から一二〇〇年前の方ですが、今も昔もこの世の姿は本質的に変わっていないと思えます。

願わくはやすらかな声を聞きたい、やさしい声を聞きたい。お浄土は

「仏の声を聞き、あるいは法の声を聞き、あるいは僧の声を聞く。あるいは寂靜の聲、空無我の聲、大慈悲の聲、波羅蜜の聲」

が聞こえてくる領域であると仏説無量寿経に説かれていま

す。

仏の声、法の声というのは真理の音声ですね。浄土は真理の音声があまねく響きわたっていると言われているのであります。

逆に、この娑婆世界では真理の言葉を聞くことは非常に少ないですね。テレビにしても新聞にしても、永遠の真理などは殆ど語られません。娯楽番組にあふれる言葉は、どうでもいい言葉、むなししいおしゃべりばかり。政治や経済の言葉は役にたつ場合もあるが、それらもその時代だけの一時的な言葉ですね。

「寂靜の聲」という安らぎの声を聞きたいです。「大慈悲の聲」が聞きたいですね。

ところで、このような憂苦の声の多いこの世でも、仏の慈悲あふれる安らかな声を聞くことができるのです。怒りや愁嘆の声を聞くことの多い人生生活の中で、浄らかな仏の大慈悲の声を浄土でなくとも、有難いことにこの世で聞くことができるのです。

今ここで聞こえるのです。かえって苦しみのこの世だからこそ、身に浸みて聞こえるのかもしれない。それは私

たちが偉いから聞こえるのではなくて、聞かせずにはおかないという阿弥陀仏の大悲の力が働いてきて下さって聞こえるのです。

「どこに」。今念仏する、その念仏が耳に「ナムアマミダブツ」と聞こえます。その声は、実は阿弥陀仏が「我、汝と共にいる、汝を抱いて離さない」の声です。お念仏は私の声でありつつ阿弥陀仏の大悲の喚び声なのです。

このことは釈尊の説法によつて、私たちは知ることができ、気づくことができるのです。これは仏法を聴かないと知ることではできません。仏法聴聞によつて、念仏申すようになり、念仏の意味を釈尊の説かれた經典のお話を聞くことによつてお聞かせいただくのです。不可思議な真実なので、すから聞かないと決して分かりません。お聞かせいただき、時いたつてお念仏がそのまま阿弥陀仏の大悲の声と感知されるのです。

さて、「弥陀の名号となえつつ」も「信心まこと」にうるのではなくて、お念仏は称えているけれども、お念仏のお心がただけなくて、いわば

お念仏において「私を救いたもう如来様まします」と受けとれず、「誓願不思議をうたが」う人は、御名を称えてはいるけれども、真実の浄土には生まれることができないとの仰せであります。

阿弥陀仏の誓いを拒絶して、自らへの救いを疑い捨て、自ら、阿弥陀仏の救済はその人の上に現実化せず、無明の闇が破れないといふことは、その人自身の想念にたぶらかされて、その想念の中に自らを押し込めている状態になっていきます。そして真実の浄土ではなく、宮殿に閉じこもっているような仮の浄土に生まれるのであると仰せられていきます。仮の浄土である（宮殿）では衆生を救済する菩薩の働きができないのであります。このように仰せ下さつて、私たちが不可思議な本願を疑う罪の深いことをおさとし下さいます。

ただ、自力であつてもお念仏一つをたのみにして称えてきた故に、そのお念仏にこもっている果遂の誓い（いつかはきつと真実浄土に至らしめずにはおかないとの阿弥陀仏

の誓い、二十願）の悲心によつて、仮の浄土ではありませんが、その浄土に生まれることができると言われています。そこは念仏行者のハカライによつてなお閉塞されていますが、六道輪廻の苦しみの領域ではないと、教えられています。

宮殿のような仮の浄土は自らのハカライによつて閉じられていきますので、**宮殿のうちに五百歳** **むなしくすぐとぞときたまう**

と仰せられているのであります。真実の浄土ではなく仮の浄土の（宮殿）内に閉じられたままむなしく時を過ごすと言われています。

宮殿は化土（化身土）とも、懈慢界ともいわれていて、真実の浄土（報土）ではありません。これは宮殿の中のように、環境は良くて環境的な苦しみは無いけれども、そこから外に自由に出て活動ができないという境涯です。衆生浄土に自由に出られなくて閉じこもっている状態を示した言葉です。そして五百歳というのは、そこに長く留まっていたことを示されたものです。宮殿のような仮の浄土に至

ると言うことは、これは私たちに仮の浄土を勧められるのではなくて、称えるお念仏の誓願をどうか素直に信じて真実報土に生まれて欲しいとの願いから、誓願を疑うことを誠められるのが趣旨であります。

それだから、誓願不思議を聞いて、あれやこれやと思いつらわず、「ああ不思議なお助けよ」と、今すぐ聞き受けてくれよとの聖人の思し召しなのです。ハカライをいましておられるのです。

真実のお浄土ではなくて、仮の浄土を化土とも言いますが、化土とはどういう領域なのか、それについて經典には詳しい説明はありません。

化土ではなくて、真実の浄土とは光明無量の浄らかな領域といわれ、大いなるさとりを開く真実の境界と説かれています。法蔵菩薩は一切の生きとし生けるものを真実の浄土へ生まれさせて、利他の働きができる浄らかな仏にしてやりたいと願い、自らが衆生に代わって仏になるための修行をされ、それが成就して衆生に大いなる悟りを開かせる極楽浄土を完成し、一切衆生

を浄土へ生まれさせたもう南無阿弥陀仏を成就して、私たちに称えさせ聞かせて下さっています。その南無阿弥陀仏が縁熟して私たちは口に称えられ、耳に聞くことができているのです。その名号を聞くのですから、それは「汝をそのままなりで浄土へ生まれさせる」「助ける」の大悲の誓いであり仰せであります。

しかるにお念仏の一行が救いの行であると聞いて、称える身になっても、その念仏は「私の救いを告げ知らせて下さる大悲の行」であると受けとらない、あるいは受けとれない、そういう人たちがたくさんでてきます。実際、親鸞聖人の在世の頃、法然聖人の教えを聞いて、「阿弥陀仏は私たち凡夫にへただお念仏を称えるばかりで浄土に生まれさせる」と誓って下さっている。じゃあ称えるだけでいい」と聞いてお念仏を申す人はたくさん生まれました。けれども、念仏は称えるのですが、「ただ称えるばかりで助ける」とまで誓って下さった大いなる大悲の仏心を受けとらず、「お念仏を称えるだけでいい」と、念佛申す自らの行為の上でのみ受けとり、念仏を浄土

に生まれる交換条件のように思いとる人が多かったのであります。称えてはいるけれども、阿弥陀仏の誓いを憑（たの）まないのです。

法蔵菩薩は、本願を建てるときから、へ一切衆生をまるまる助ける」という念仏往生の誓いを聞かせても、なお衆生は自分をたのみにして、阿弥陀仏にまかせようとしないうちに出るのであると先に知り抜いて下さって、本願を疑惑して念仏する者をどうするかも御思案になられたのでありましょう。そうして、念仏は申し続けていても本願を疑惑して、生を終える者をもなんとか救いに導いてやりたいとの広大な慈悲心から、そういうものを真実の浄土へ至らしめる途上の境界として、化土（かりの浄土）を立てて、そこで疑惑の衆生をさらに教え導いて本願への疑惑を除去とされる、その境界を化土と説かれているのでありましょう。

それゆえ宮殿である化土は、衆生が本願を疑う罪の結果であるとともに、念仏の衆生をどこどこまでも見捨てまいとする阿弥陀仏のやるせない慈悲のお手立ての世界なの

でありましょう。その化土において、衆生は自らの疑いの罪を深く自覚せしめられ、疑いを除かれてついには弥陀をたのみ真実報土へと至らしめて下さるのであります。その間の長さが五百歳と説かれています。それは疑う罪の深さを時間的に表現したものでありましょう。

だからこのご和讃のお心を聞かせていただくということ、は、「それじゃあ化土で結構ですわ」ではなくて、阿弥陀仏のお慈悲の広大なことを聞き、弥陀の本願を疑う罪の深いことを知って、今ここで南無阿弥陀仏は「こんな疑い深い私をまるまる受け入れて下さって、浄土へ至らせて下さる。ああなんと有難い、不思議なことよ」と、広大な大悲のお心を今いただきなさいとの、宗祖聖人の思し召しであります。



(了)

## 《住職雑感》

五月に福井別院であしかけ三日間、朝昼晩と、法話と座談を繰り返す。座談の参加者は十人ほどであるが、皆さん熱心である。仏法を聞いてもそれを口に出して述べ、語り合い、同行善知識からいろいろ指摘してもらわないと、自分の了見内に留まってしまいがちである。蓮如上人が「談合せよ」と何度も仰せられたのは、自らの受けとり間違いは自分では分からないから、自分の了解を述べ、他の人の領解を聞き、他の人からの指摘を受けて、間違いが正される。そういうプロセスの中で「お育て」というのが自然に行われるからであろう。聞法を重ねて中で、自分が育っているかどうか、それは本人には分からない。自分の間違いもなかなか気がつかないが、自分が聞法によつて育ってきていることも分からぬものである。気がついてみたらいつのまにか本願に疑いなくなっていたという方がおられるが、そういうことがあるのはこのゆえであろう。

座談でもう話し合うことが無くなったと思っても、いざ車座になると次々と話が出てくるのが不思議であるし、有難い。今回は同じ福井別院で十一月十七日〜十九日の間である。

# 木村無相さんの法信

## 21

(五十八年九月八日付けのおたよりの前号からの続き)

\* \* \*

それで、如来廻向の信ということとは、凡夫の凡心をはたらかせて信ずるといふような「自心建立の信心」ではなくて、如来廻向の信とは、

「信心の智慧」と御和讃ある如く「如来の智慧」「仏智」そのもの、「如来そのもの」が、我が虚仮不実の凡心と向こうから一つに、「仏心凡心一体」と一つ

になって下されて(この虚仮不実の凡心とハナレナクなって下さって)、その如来そのもの、如来のお智慧そのもの、即ち「如来廻向の眞実信心」によって、

凡夫のココロからおこす自心建立の信心は、虚仮不実で、ホンモノではないぞよと、否定し、ワレワレ凡夫には、生ま

れながらにして、「眞実信心」といふような、「信心の智慧」といふような殊勝なモノはツユチリホドもないぞよと、知らせたもうのすねえ。

それで、「他力廻向の眞実信心」といふ特別なものが、「如来」とか「本願」とか「大慈大悲」とか「仏智」とかいうもののホカに、あるのではなくて、「如来」とか「大悲心」とか「仏智」とか名

づけられている「如来そのもの」が、「大悲心そのもの」が、「仏智そのもの」が、「ワレワレの「虚仮不実の凡心、煩惱妄念心」に向こうから、一体になって下さ

て、ハナレなくなるという一体であって、

(この場合の一体はワレワレの凡心、煩惱心が如来になり、大悲心になり、仏智になるというようない体ではなくて、ワレワレの凡心と仏心とが向こうから不離

はなれなくなるという一体であって、凡心即仏心、凡夫即仏というようない体ではなくて、ワレワレと離れなくなって下

さるという意味の一体不離のことであること、よく承知しておかなくては、聖道門と同じようなことになる)

それゆえにこそ、  
丁度、わが心中に鏡をいただいたようなものであって、ワレワレの凡心と、仏智、如来という鏡がはなれなくなったオ

カゲで、その「鏡」を名づけて、ワレワレの凡心と一つになってハタライテ下さる「如来」「仏智」「大悲」のことを、「他

力廻向の信心」と名づけるのであって、そうした「如来・仏智・大悲心・願心」のホカに、別に「信心」といふ特別なものがあって、それを「いただく」とい

うようなことではなく、「他力廻向の信心」とは、「如来」が「仏心」が「仏智」が、向こうより「我れに來たつて」、ワレラ

が虚仮不実、濁悪の「凡心」と一つになつて、ハタライテダサル時、その「如来」「仏智」「大悲心」「願心」のことを、  
他力廻向の信心  
と、ただ、「名づけるだけ」であつて、  
他力廻向の信心

といふような、特別なモノをいただくのではない、

「如来」「本願」「願心」「仏心」「仏智」といふものが、ワレワレの凡心と一つになつてハタライテ下さる、それを「廻向のご信心」と名づけるのであって、そうした特別なモノが、如来のお手もとにあるのではない。

○  
それをお説教で、  
○  
「信心をいただく、ご信心をいただく」といふから、「如来」のお手もとに、ナ

ニカ「信心」といふ特別なものがあつて、ソレを「いただくように」受けとつてしまふのです。

それは聞法者が、わからんだけでなく、お説教する坊さん自身、先生自身が、「如来廻向のご信心」といふことが、わからんから、結局そういうマチガッタコトになるのだと思ひます。

○  
生きた他力廻向の信心、即ち仏智は、如来は、

ワレワレ凡夫は、生まれながらにして、純粹に信ずるといふようなココロのハタ

ラキは全然ないといふことを知らしめ、ワレワレのイワユル「信心」は、凡心

からの「自心建立の信心」であつて、ホントの信心ではないといふことをハッキリと、知らせ下されるのが、そういうオハタラキを、

○  
「如来の廻向の信心」といふのでありましよう。  
○  
それで聖人は、『唯信鈔文意』に、  
釈迦如来(弥陀如来といただいても同じコトなのでしよう。二尊一体ですから)、それで『文意』に、

釈迦如来、よろづの善の中より、名号をえらびとりて、

五濁、悪時、悪世界、  
悪衆生、邪見、無信の者に  
与えたまえるなりと  
知るべし

と仰せられているのでありましよう。  
「如来廻向の眞実信心」信心の智慧によりてこそ、  
この世は

五濁悪時悪世界  
であると知らしめたまい、  
この身は、  
悪衆生、邪見、無信の者、  
と、知らしめたまい、

この者のために、名号をえらびとりて与えたまえるなり、  
と、それら一切、「如来廻向のご信心」に依つて、信知せしめて下さるのであつて、この如来廻向の信心がなくては、

以上のこと、特にわが身は  
悪衆生、邪見、無信の者、  
であるとは信知することができぬことでありましよう。

『教行信証』信巻の信樂のところ拝読申しても

眞実信心とは、どういふものか、  
衆生に「信なし」とわれわれの信を否定されていること、よくわかりましよう。

○  
お手紙の  
(一) 如来廻向の信心といふことは、  
凡夫の方からの信心を否定し、又、  
信ずる力の無きものと知らせ給う  
とあるは、その通りであろうといふほ

かはありません。  
(続く)